

## **第 2 回**

# **沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会**

**会期：平成 30 年 6 月 2 日(土)17:30～**

**会場：ヒルトン沖縄北谷リゾート Ball Room1**

**主催：沖縄県病院薬剤師会**

## 目次

17:25～17:30

開会の辞 琉球大学医学部附属病院 中村 克徳

17:30～18:30

### 『研究発表』

座 長 沖縄県立中部病院 川平 浩子

1) 「病棟薬剤師によるバンコマイシン物血中濃度モニタリングの評価」

浦添総合病院薬剤部 東千夏

2) 「精神科薬物治療の変遷－10 年間の処方調査から見てきたこと－」

平安病院薬剤係 大城舞子

3) 「当院におけるラムシルマブ併用レジメンの施行状況調査」

豊見城中央病院薬剤科 上原政文

4) 「抗HIV薬の薬物間相互作用を回避するために行った介入の報告」

沖縄県立南部医療センター薬局 齊藤うたた

5) 「当院での妊娠とくすり外来における薬剤師による介入効果の検討」

沖縄県立中部病院薬局 野波陽子

18:30～18:35

閉会の辞 友愛会 豊見城中央病院 橋本 孝夫

## 第2回沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会開催にあたり

沖縄県病院薬剤師会会員の皆様、平素より病院薬剤師会の活動にご理解とご協力賜り誠にありがとうございます。

さて、昨年度より沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会の開催が沖縄県病院薬剤師会役員会で承認され、今回が第2回目の開催の運びとなりました。

沖縄県病院薬剤師会学術研究発表会は琉球大学医学部附属病院薬剤部の教授・薬剤部長であります中村克徳先生が病薬会誌の巻頭言で話されているように「病院・診療所薬剤師の学術技能向上」および「学会、講習会、研修会の開催」、さらに「研究発表の場の提供」や「他施設薬剤師とのディスカッション」等を目的としております。

今後ますます、この会を発展させ継続開催していければと考えております。今後とも皆様のご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

|      |          |        |
|------|----------|--------|
| 運営委員 | 琉球大学附属病院 | 潮平英郎   |
|      | 琉球大学附属病院 | 伊差川サヤカ |
|      | 沖縄県立中部病院 | 勝連真人   |
|      | 沖縄県立中部病院 | 上原淳奈   |
|      | 沖縄県立宮古病院 | 具志頭聡子  |
|      | 沖縄県立北部病院 | 吉本尚志   |
|      | 那覇市立病院   | 永井賢作   |
|      | 浦添総合病院   | 浜元善仁   |
|      | 中頭病院     | 島袋朝太郎  |
|      | 豊見城中央病院  | 小杉卓大   |
|      | 豊見城中央病院  | 三田井菜菜子 |
|      | 豊見城中央病院  | 上原あかね  |

### ご案内

1) 今回の研究発表会の口演時間は下記の通りとなります。

発表: 7分、質疑: 5分、計 12分

|      |
|------|
| Memo |
|      |
|      |
|      |
|      |
|      |
|      |

## 病棟薬剤師によるバンコマイシン薬物血中濃度モニタリングの評価

○東千夏、上原佳子、平田やよい、浜元善仁  
仁愛会浦添総合病院 薬剤部

### 【目的】

当院では、バンコマイシン(以下、VCM)の薬物血中濃度モニタリング(以下、TDM)を病棟薬剤師が実施している。今回、当院の TDM 業務がガイドラインに準じているか調査し、有効性・安全性を検討した。

### 【方法】

2016年10月から12月にVCMトラフ値を測定した56例を後ろ向き調査した。調査項目は、初回採血タイミング、実測トラフ値、TDM解析時の予測AUC(血中濃度曲線化面積)、初回設計率、TDM解析結果の受入率、薬剤性腎障害の発生率とした。

### 【結果】

初回採血タイミングは2-3回目投与直前11例(20%)、4-5回目投与直前31例(55%)、6回目以降14例(25%)だった。TDM解析後の初回トラフ値は $<10\mu\text{g/mL}$ 10例(18%)、 $10-15\mu\text{g/mL}$ 23例(41%)、 $15-20\mu\text{g/mL}$ 15例(27%)、 $>20\mu\text{g/mL}$ 2例(3%)だった。そのうち、初回設計後のトラフ値は、上記順に6例(33%)、8例(44%)、4例(22%)、0例だった。初回設計率は18例(32%)であり、TDM解析結果の受入率は98%(55例)、薬剤性腎障害発現率は0%だった。

### 【考察・結語】

薬剤師が初回投与設計に関わることで、より早期に血中濃度やAUCが有効域に達する可能性が高いことが示唆された。また初回設計後のトラフ値 $>20\mu\text{g/mL}$ が0件であること、初回採血実施が5回目以内75%と早期に実施していることが薬剤性腎障害発生率0%へ寄与したと考える。これらのことから安全性においてはTDMガイドラインに準じて実施できていると考えるが、有効性に関しては初回設計率を向上させることで、更なる治療効果の向上に繋がると思われる。ガイドラインから逸脱した採血タイミングの要因としては、週末・祝日の業務体制も考えられ、今後は初回設計介入体制、週末・祝日のTDM業務体制が課題となる。

## 精神科薬物治療の変遷～10年間の処方調査から見てきたこと～

○大城舞子

医療法人へいあん 平安病院 診療部薬剤係

### 【緒言】

わが国の精神医療における向精神薬の使用量は、諸外国に比して用量・剤数ともに多いことが報告されている。しかし近年、第二世代抗精神病薬、メラトニン受容体作動薬、オレキシン受容体拮抗薬などの登場により精神科薬物治療における多剤大量処方の是正、単剤化への取り組みが盛んに行われている。当院が 2007 年から毎月行っている向精神薬及び副作用予防目的の抗パーキンソン薬の使用量調査の結果から、10 年間の精神科薬物治療の変化と、今後の課題について考察し報告する。

### 【方法】

2007 年 1 月から 2018 年 4 月までに当院に入院した統合失調症の診断名がついた患者の処方について、抗精神病薬、抗不安薬・睡眠薬、抗パーキンソン薬の投与量、剤数、抗精神病薬の単剤率を月に 1 回定点調査した。

### 【結果】

2007 年 1 月調査開始時の抗精神病薬、抗不安薬・睡眠薬、抗パーキンソン薬の平均投与量は CP(クロルプロマジン)換算 857 mg、DAP(ジアゼパム)換算 20.1 mg、BP(ビペリデン)換算 2.7 mg、抗精神病薬平均投与剤数 2.5 剤、抗精神病薬単剤率 21%だったのに対し、2018 年 3 月時点

では CP 換算 678 mg、DAP 換算 8.5 mg、BP 換算 0.4 mg、抗精神病薬平均投与剤数 1.5 剤、抗精神病薬単剤率 47%と投与量及び剤数の減少と単剤率の増加が認められた ( $p < 0.05$ )。

### 【考察】

本調査を行った 10 年間で当院全体の向精神薬および副作用予防目的の抗パーキンソン薬の多剤大量処方が是正されていることが明らかとなった。その要因としては診療報酬改定や新薬の発売、薬剤師の処方提案を含む薬剤管理指導業務等が考えられる。一方で抗不安薬・睡眠薬の使用量は 7 年程度横ばいであり、今後薬剤師が積極的に介入し安全な減量と適正処方への貢献が求められるところである。

## 当院におけるラムシルマブ併用レジメンの施行状況調査

○上原 政文<sup>1)</sup>、大城 真理奈<sup>1)</sup>、照屋 剛<sup>2)</sup>、佐藤 陽子<sup>3)</sup>、橋本 孝夫<sup>1)</sup>

- 1) 社会医療法人友愛会 豊見城中央病院 薬剤科
- 2) 社会医療法人友愛会 豊見城中央病院 外科
- 3) 社会医療法人友愛会 豊見城中央病院 内科

### 【背景・目的】

ラムシルマブ(RAM)は血管内皮細胞増殖因子受容体(VEGFR)-2 に対するヒト型モノクローナル抗体で、血管新生阻害作用により抗悪性腫瘍効果を示す薬剤である。RAM 製剤は2015 年 6 月に本邦にて販売開始となり、進行再発胃がん、大腸がん、非小細胞肺癌に対して順次保険適応となった。そこで今回は豊見城中央病院(当院)における RAM の投与状況を報告する。

### 【方法】

調査対象は 2015 年 12 月から 2017 年 10 月までの期間に RAM が投与された症例、すなわち胃がんに対する RAM+パクリタキセル(PAC)、大腸がんに対する RAM+イリノテカン+レボホリナート+5-フルオロウラシル(FOLFIRI)、非小細胞肺癌に対する RAM+ドセタキセル(DOC)が施行された症例とした。電子カルテより診療記録や検査結果を参照し、対象患者における投与状況や有害事象の発現状況を後方視的に調査した。

### 【結果】

上記期間における当院での RAM 投与症例は合計 16 例であった。RAM+PAC は 10 例施行され、一次/二次/三次/五次治療の内訳は 2/5/1/2 例であった。RAM+FOLFIRI は 5 例施行され、二次/三次/五次治療の内訳は 1/3/1 例であった。RAM+DOC は 1 例あり、四次治療として施行された。RAM の用量規定因子に高血圧と蛋白尿が挙げられるが、RAM 開始後に降圧薬が新たに処方、あるいは増量となった症例は 1 例であった。尿中蛋白/クレアチニン比が 2 以上の蛋白尿の発現は 2 例で、いずれも以降の RAM 投与は中止となった。好中球減少により併用抗がん剤の減量や投与延期となった症例は 11 例であった。対象症例はすべて上記期間内に RAM の投与を終了しており、そのうち PD による終了が 8 例、有害事象の発現による終了が 8 例であった。

### 【考察】

RAM 併用レジメンはいずれのがん種においても二次治療レジメンとして推奨されているが、当院では様々な前治療歴を有する症例に導入されていることが分かった。また RAM による骨髄抑制の増強が報告されているが、当院においても同様の傾向がみられ、併用抗がん剤の用量強度に影響することが示唆された。本調査では RAM の VEGFR-2 阻害作用に起因する有害事象の発現が計 3 例にとどまったものの、心血管系の有害事象や蛋白尿に関しては今後も注意深く評価し、薬剤の用量調整や検査項目の提案を行っていきたい。

## 抗 HIV 薬の薬物間相互作用を回避する為に行なった介入の報告

○齊藤 うたた、端山 佳菜子、垣花 真紀子

沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 薬局

### 【目的】

沖縄県における HIV 新規感染者数は、対人口比では全国のなかでも上位に入る。当院の HIV 患者数も年々増加しており、そのほとんどは抗 HIV 薬を服用している。しかしながら、抗 HIV 薬の専門的な知識を持つ人材は限られており、しばしば併用薬との薬物間相互作用が問題となる。そこで、抗 HIV 薬の薬物間相互作用を回避する為介入を行なった事例を報告する。

### 【事例】

- ①医師が薬剤を処方する際に、併用禁忌の薬剤がある場合は電子カルテ上で警告が出る。しかし、手書きの注射箋で運用を行なっている部署において、服用中の抗 HIV 薬と併用禁忌の薬剤が使用された。
- ②院内の処方箋には、併用薬との薬物間相互作用の禁忌情報が印字される。しかし、薬局内部門システム上で院外処方との連携がとれていなかったために、院外で併用禁忌の薬剤が処方されていることに気づけなかった。
- ③他医療機関を受診する際に、抗 HIV 薬の服用を申告しない患者がいる。

### 【結果】

- ①医療安全委員会を通して、該当部署で使用頻度の高い薬剤と抗 HIV 薬の相互作用に関するお知らせを発行した。
- ②全ての併用薬との薬物間相互作用の禁忌情報を院内処方箋に印字されるようにした。
- ③他医療機関を受診した際は、薬剤を処方される前に患者から当院に電話で連絡をしてもらうことで、服用中の抗 HIV 薬との相互作用の確認が事前にできた。

### 【考察】

抗 HIV 薬の専門的な知識を持つ人材の育成はもちろんだが、電子カルテ等のシステムで補えるものは最大限活用する必要がある。薬物間相互作用の問題は抗 HIV 薬に限られたことではなく、今回の薬局内部門システム改善の寄与は大きい。HIV 患者は、未だにわからない HIV 感染症に対する偏見の恐れから抗 HIV 薬の服用を隠す傾向にあり、患者の心情に沿った柔軟な対応が求められる。

## 当院での妊娠/授乳とくすり外来における薬剤師による介入効果の検討

○野波陽子<sup>1)</sup>、大畑尚子<sup>2)</sup>、喜友名朝史<sup>1)</sup>、川平浩子<sup>1)</sup>

沖縄県立中部病院 薬局<sup>1)</sup>周産期<sup>2)</sup>

### 【目的】

現在、我が国においては、医薬品の妊婦・胎児への影響に関して、必ずしも十分な情報があるとはいえない。そこで、厚生労働省の事業として、2005 年 10 月より国立成育医療研究センターに妊娠と薬情報センターを設置し、妊婦・胎児に対する服薬の影響に関する相談・情報収集を実施している。当院は 2013 年に妊娠と薬情報センターの沖縄県地域拠点病院となり、妊娠・胎児に対する服薬の影響に不安を持つ相談者に、妊娠と薬情報センターと連携し「妊娠/授乳とくすり外来」で医師、薬剤師、助産師による情報提供を行っている。薬剤師は、医薬品の添付文書は勿論の事、妊娠と薬情報センターからの回答書や各種文献を基に薬の影響について評価し、外来で相談者へ情報提供を行っている。今回、妊娠/授乳とくすり外来での薬剤師の介入と、その効果について後方視的に調査を行ったので報告する。

### 【方法】

2016 年 4 月から 2018 年 3 月の 2 年間に妊娠/授乳とくすり外来を実施した症例について、紙カルテ及び電子カルテの面談記録を用いて後方視的に調査を行った。

### 【結果】

過去 2 年間の妊娠/授乳とくすり外来件数は 21 件。年齢は 24～43 歳。妊娠週数は妊娠初期～妊娠 14 週未満 6 例、妊娠 14 週～妊娠 28 週未満 6 例、妊娠 28 週以降 4 例、未妊娠 5 例。相談者の既往としては、てんかん 4 例、うつ病 2 例、パニック障害 2 例、高血圧 2 例、その他 19 例であった。相談内容は、①持病で服用している薬の妊娠に対する影響を知りたい 15 例、②妊娠中に服用してしまった薬が心配 5 例、③今から服用する可能性のある薬について知りたい 3 例、④その他 5 例。相談のきっかけは、医師からすすめられた 14 例、自ら希望した 6 例、友人からすすめられた 1 例。医療者が入力した妊娠/授乳とくすり外来面談記録を基に、薬剤師の介入による効果の評価を行った。面談記録より、話が聞けてスッキリした、安心した 17 例(80%)、服薬に不安がある 2 例(10%)、記載なし 2 例(10%)であった。

### 【結語】

妊娠/授乳とくすり外来を実施した 80%の相談者より「聞きたいことが聞けてスッキリした」「安心した」との発言があり、不要な不安を解消できたと考える。妊娠/授乳とくすり外来で服薬に不安を持つ相談者に薬剤師が介入することで、治療や妊娠へ前向きになった相談者もいた。外来後は、周産期スタッフと連携し、相談者のフォローアップを行っている。今後も、妊婦・胎児への服薬に不安を持つ相談者に耳を傾け、薬剤師として妊娠/授乳とくすり外来に携わっていきたい。